浜名湖を見下ろす山の上から、文献に出てこない幻の山岳寺院が出現

国定指定史跡（平成13年1月29日 文部科学省告示第8号）

大知波峠廃寺

◆おおちばとうげはいじ

【静岡県湖西市】

浜名湖の北西部にある湖西連峰は、かつて遠江と参河の国境であり、今日では尾根が静岡県と愛知県の県境となっている。湖西連峰の山中に大知波廃寺はある。伽藍は、北と西、南を尾根に囲まれ、約三・七ヘクタールほどの範囲に広がる。山中には随所に寺院や神社が点在し、信仰の山塊を形成している。

▲ 礎石建物 B-1 の全景（南西より）
池の北岸へ最初に建てられた10世紀前半の礎石建物である。須弥壇を設けて巡らし南西する仏堂である。

▼ 大知波峠廃寺より浜名湖を望む（西より）
眼下に浜名湖が広がり、冬の晴れた日は遠く遠州全域を見渡すことができる。
廃寺は鉄塔下標高340メートルほどの尾根上にある。

▼出土した多彩な土器
灰釉陶器・緑釉陶器・土師器が大量に出土した。供養具の六器や花瓶・鉢は仏堂から、鍋などの日常生活具は他の遺構から出土している。

◆文献に出てこない幻の山岳寺院

大知波峠廃寺関連の古文書や伝説は残されていない。一九八九年からの七年間の発掘調査によって、礎石建物一二棟、池、通路跡、埋納遺構、磐座が発見され、大きく三つの時期を経たことがわかった。まず、詳細を不明とするが八世紀後半に当地の利用が行われる時期。そして十世紀中頃から十一世紀前半に伽藍が整えられ、いったん廃絶する十一世紀末までの時期。さらに、十二世紀後半に地蔵堂が再び建立され、埋納や柴燈護摩を行うなど山伏の行場となる時期である。

建物は五間四面や三間四面あるいは三間二面のものなど多様で、技術的にも重要な知見を提供する。仏堂以外に、居住用の建物や門と思われる施設もある。小谷を石垣で堰き止めた上下二段の池からは、多量の墨書土器や木製品とともに、水槽、閼伽井など水に関する遺構が発見された。

出土した灰釉陶器・緑釉陶器・土師器の大半は地元産で、六器や花瓶・鉢などの供養具や碗・鍋の日常生活具がある。墨書土器は約四五〇点ほど出土した。

◆古代と中世のはざまで

大知波峠廃寺は、伽藍や建物構造が判明する平安時代の山寺として重要である。主要仏堂が随時加わり伽藍を構成していく様は、在地の強い磐座・若水・水分信仰を母体として発展したものであり、七堂伽藍のような規格化された寺院の対極にある。十一世紀中頃の末法を境として、墨書土器や出土遺物が激減し十一世紀末頃に廃絶する姿は、古代と中世のはざまにあった大きな信仰の変革をも示唆する。

▲墨書土器から
「大波？寺」と「御仏供」

▲遺跡の中心部・礎石建物の配置
遺構・遺物の保存状態がよいので、礎石建物、池、通路、埋納、磐座などの遺構が細部にわたり明らかとなった。
建物は岩盤を切り盛りし概ね方位に沿わせている。仏堂は高位に占地し、石垣を巡らすものもある。

◆問い合わせ
湖西市教育委員会　社会教育課
湖西市古見1046番地
TEL053-576-1140